

## 1 普通作物・特用作物の防除基準

稲病害防除農薬一覧（本田期）

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	適用病害名						
					いもち病	穂枯れ（こま葉枯病菌）	もみ枯細菌病	紋枯病	稲こうじ病	白葉枯病	内穎褐変病
フジワン粒剤	6	イソプロチオラン	2	3※1	○				○		
モンガリット粒剤	3	シメコナゾール	2	2※2		○		○	○		
コラトップ粒剤5	16.1	ピロキロン	2	3※3	○		○				
コラトップジャンボP	16.1	ピロキロン	2	3※3	○						
オリゼメート粒剤	P2	プロベナゾール	2	2※4	○	○	○			○	
ブラシン粉剤DL	U14	フェリムゾン	2	2	○	○	○		○		○
	16.1	フサライド		3							
ブラシンフロアブル	U14	フェリムゾン	2	2	○	○	○		○		○
	16.1	フサライド		3							
トライフロアブル	U16	テブフロキン	2	2	○	○			○		
バリダシン液剤5	U18	バリダマイシン	5	6※5			○	○			
Zボルドー粉剤DL	M1	塩基性硫酸銅	—	—					○		

※1 移植前は1回以内、本田では2回以内

※2 移植時までの処理は1回以内

※3 直播では種時又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内

※4 移植時までの処理は1回以内

※5 育苗箱灌注は1回以内、本田では5回以内

稲害虫防除農薬一覧（本田期）①

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	適用害虫名					
					ニカメイチュウ	ウンカ類	ツマグロヨコバイ	イネツトムシ	コブノメイガ	フタオビコヤガ
スミチオン乳剤	1B	MEP	2	3※1	○	○※a		○		○
エルサン乳剤	1B	PAP	2	2	○	○※a	○			○
キラップ粒剤	2B	エチプロール	2	2※2		○				
トレボン粒剤	3A	エトフェプロックス	3	3	○※b	○	○			
トレボン乳剤	3A	エトフェプロックス	3	3		○	○		○	
なげこみトレボン	3A	エトフェプロックス	3	3	○※b	○	○			
トレボン粉剤DL	3A	エトフェプロックス	3	3	○	○	○	○	○	○
アドマイヤー1粒剤	4A	イミダクロプリド	2	3※3		○	○			
スタークル粒剤 アルバリン粒剤	4A	ジノテフラン	3	4※4	○	○	○			
スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	4A	ジノテフラン	3	4※4		○	○			
スタークル粉剤DL アルバリン粉剤DL	4A	ジノテフラン	3	4※4	○	○	○			○
スタークル豆つぶ	4A	ジノテフラン	3	4※5		○	○			
ダントツ粒剤	4A	クロチアニジン	3	4※6	○	○	○			
ダントツ水溶剤	4A	クロチアニジン	3	4※6		○	○			
エクシードフロアブル	4C	スルホキサフロル	3	3		○	○			
エミリアフロアブル	4F	フルピリミン	2	3※7		○	○			
パダン粒剤4	14	カルタップ	6	6※8	○			○	○	○
パダンSG水溶剤	14	カルタップ	6	6※8	○			○	○	
			1（移植時）		○				○	
アプロード水和剤	16	ブプロフェジン	4	4		○※c	○※c			

※1 種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内

※2 は種時（直播）又は移植時までの処理は1回以内

※3 は種時（直播）又は移植時までの処理は1回以内、本田での散布は2回以内

※4 育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人航空機散布は合計3回以内

※5 育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計3回以内

※6 直播での種時又は移植時までの処理は1回以内、本田での散布、空中散布、無人航空機散布は合計3回以内

※7 直播での種時又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内

※8 浸種前は1回以内、浸種後から直播での種時又は移植時までの処理は1回以内

※a ヒメトビウンカ適用 ※b 第1世代適用 ※c 幼虫適用

稲害虫防除農薬一覧（本田期）②

農薬名	R A C コード	有効 成分名	本剤の 使用 回数	当該成分を 含む農薬の 総使用回数	適用害虫名						
					カ メ ム シ 類	イ ネ ミ ズ ゾ ウ ム シ	イ ネ ド ロ オ イ ム シ	イ ネ ヒ メ ハ モ グ リ バ エ	イ ネ ハ モ グ リ バ エ	イ ネ ゾ ウ ム シ	イ ナ ゴ 類
スミチオン乳剤	1B	M E P	2	3※1	○		○	○	○		
エルサン乳剤	1B	P A P	2	2	○		○	○	○		
キラップ粒剤	2B	エチプロール	2	2※2	○						
トレボン粒剤	3A	エトフェンプロックス	3	3		○	○	○		○	○
トレボン乳剤	3A	エトフェンプロックス	3	3	○	○	○				○
なげこみトレボン	3A	エトフェンプロックス	3	3	○ ※d	○	○				○
トレボン粉剤DL	3A	エトフェンプロックス	3	3	○	○ ※e	○	○			○
スタークル粒剤 アルバリン粒剤	4A	ジノテフラン	3	4※4	○	○	○				
スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	4A	ジノテフラン	3	4※4	○						
スタークル粉剤DL アルバリン粉剤DL	4A	ジノテフラン	3	4※4	○		○				○
スタークル豆つぶ	4A	ジノテフラン	3	4※5	○						
ダントツ粒剤	4A	クロチアニジン	3	4※6	○						
ダントツ水溶剤	4A	クロチアニジン	3	4※6	○		○				
エクシードフロアブル	4C	スルホキサフロル	3	3	○						○
エミリアフロアブル	4F	フルピリミン	2	3※7	○		○				
パダンSG水溶剤	14	カルタップ	6	6※8						○	
			1（移植時）			○	○				

※1 種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内

※2 は種時（直播）又は移植時までの処理は1回以内

※4 育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人航空機散布は合計3回以内

※5 育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計3回以内

※6 直播での種時又は移植時までの処理は1回以内、本田での散布、空中散布、無人航空機散布は合計3回以内

※7 直播での種時又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内

※8 浸種前は1回以内、浸種後から直播での種時又は移植時までの処理は1回以内

※d イネクロカメムシ適用 ※e 成虫適用

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
<p>種子伝染性病害虫 (いもち病 ・ばか苗病 ・もみ枯細菌病 ・ごま葉枯病 ・褐条病 ・苗立枯細菌病 ・イネシガレセンチュウ)</p>	<p>1 発病圃場のもみは種子としない 2 塩水選を行う 3 種もみ消毒 (1)温湯消毒 消毒方法は、温湯処理による稲の種子消毒法の頁参照 (2)薬剤消毒 ①殺菌剤 (いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病、ごま葉枯病、褐条病、苗立枯細菌病) テクリードCフロアブル 200倍 24時間種子浸漬 スポルタックスターナSE 200倍 24時間種子浸漬 (いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病、褐条病、苗立枯細菌病) エコホープDJ 200倍 24～48時間種子浸漬 ②殺虫剤 (イネシガレセンチュウ) スミチオン乳剤 1,000倍 6～72時間浸漬 ※他の処理方法は、種子消毒用農薬一覧の頁参照 4 育苗箱防除 稲育苗期の病害虫農薬一覧の頁参照</p>	<p>浸種前-1 浸種前-1 浸種前～催芽前- は種前-1</p>	<p>1 種子伝染性病害虫は同時期防除（混用適否に注意）を基本とする。 2 種子消毒の手順は、稲育苗管理の留意点の頁参照。 3 イネシガレセンチュウによる黒点米が発生すると品質が低下するので種子消毒を徹底する。 4 ばか苗病防除は液温が15℃以上になるよう設置場所及び保温の工夫をする。 5 いもち病は耐病性品種を用いる。 6 褐条病については、周辺のイネ科雑草が感染源となるので、畦畔等の刈り込みを行う。</p>
<p>苗立枯病</p>	<p>○は種時 1 箱消毒（資材消毒の頁参照） 2 薬剤処理 (1)土壌灌注 (リゾープス菌) ダコニール1000 1,000倍 500ml/育苗箱(用土約5L) (リゾクトニア菌、白絹病菌) バリダシン液剤5 1,000倍 500ml/育苗箱(用土約5L) (フザリウム菌、ピシウム菌) タチガレン液剤 1,000倍 500ml/育苗箱(用土約5L) (フザリウム菌、リゾープス菌、トリコデルマ菌) ダコレート水和剤 600倍 500ml/育苗箱(用土約5L) (2)土壌混和 (フザリウム菌、ピシウム菌) タチガレン粉剤 3g/育苗箱(用土約5L) タチガレエースM粉剤 6g/育苗箱(用土約5L)</p>	<p>は種時～緑化期 (は種14日後まで) -2 は種時～発病初期 -1 は種時又は発芽後 -2 は種時～緑化期 (は種14日後まで) -2 は種前-1 は種前-1</p>	<p>1 箱はよく水洗してから消毒する。 2 その他連用する資材はケミクロンG、イチバン500倍液を散布する（資材消毒の頁参照）。 3 乾燥しないように注意する。 4 箱のベタ積みはリゾープス菌の発生が多い。 5 ダコニール1000とタチガレン液剤、タチガレン粉剤、タチガレエースM粉剤の近接施用は避ける。 6 人工培土、マットを使用する場合は、必ず薬剤防除を行う。 7 床土のpHは4.5～5.5に調整する。 8 ダコニール1000、バリダシン液剤5、タチガレン液剤、ダコレート水和剤、タチガレン粉剤、タチガレエースM粉剤は稲（箱育苗）登録。</p>

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
<p>苗立枯病</p>	<p>○生育中(発病初期)</p> <p>1 箱育苗(土壌灌注) (フザリウム菌、ピシウム菌) タチガレン液剤 1,000倍 500ml/育苗箱(用土約5L) タチガレースム液剤 1,000倍 500ml/育苗箱(用土約5L) (フザリウム菌、トリコデルマ菌、 リゾープス菌) ダコレート水和剤 600倍 500ml/育苗箱(用土約5L)</p> <p>(リゾクトニア菌、白絹病菌) バリダシン液剤5 1,000倍 500ml/育苗箱(用土約5L)</p> <p>2 畑苗代(土壌灌注) (フザリウム菌、ピシウム菌) タチガレン液剤 1,000倍 3L/m<sup>2</sup></p>	<p>は種時又は発芽後 - 2</p> <p>は種時又は発芽後 - 1</p> <p>は種時～緑化期 (は種14日後まで) - 2</p> <p>は種時～発病初期 - 1</p> <p>は種直後又は発芽後 - 2</p>	
<p>いもち病</p>	<p>○育苗期(育苗箱灌注) ダコレート水和剤 400倍 500ml/育苗箱(用土約5L)</p> <p>○田植え前 フジワン粒剤 50g/育苗箱(用土約5L) D r. オリゼフェルテラ粒剤 50g/育苗箱(用土約5L)</p>	<p>は種時- 1</p> <p>苗の緑化期～ 移植直前- 1</p> <p>緑化期～移植当日 - 1</p>	<p>育苗日数が長引かないように注意する。</p>
<p>いもち病 (葉いもち)</p>	<p>○田植え直前 稲育苗期の病害虫農薬一覧の頁参照</p> <p>○本田期 オリゼメート粒剤 3kg/10a</p> <p>フジワン粒剤 湛水散布 3kg/10a</p> <p>コラトップ粒剤5 3kg/10a</p> <p>コラトップジャンボP 小包装(ハック) 10個(500g)/10a</p> <p>ブラシン粉剤DL 3kg/10a</p> <p>ブラシンフロアブル 1,000倍</p> <p>トライフロアブル 1,000倍</p>	<p>初発10日前～初発時 (収穫14日前)- 2</p> <p>初発7～10日前 (収穫30日前)- 2</p> <p>初発10日前～初発時 - 2</p> <p>初発20日前～初発時 - 2</p> <p>7- 2</p> <p>7- 2</p> <p>14- 2</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ケイ酸質肥料を施用する。</li> <li>2 発病苗の本田持ち込みは避ける。</li> <li>3 施肥は、多肥を避け、最高分けつ期前及び穂肥期の追肥で調整する。</li> <li>4 未熟な家畜糞尿の施用は避ける。</li> <li>5 置き苗は、いもち病の発生源となるので、速やかに処分する。</li> <li>6 粒剤は予防散布剤として用いる。</li> <li>7 罹病性品種(コシヒカリ等)及び常発地では予防散布を徹底する。</li> <li>8 ジャンボ剤は、藻や浮草の多発水田では効果が劣るので使用しない。</li> <li>9 粉剤は飛散の少ないDL剤の使用が望ましい。</li> </ol>

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
いもち病 (穂いもち)	○幼穂形成期、穂ばらみ期、穂揃期 葉いもちの本田防除の薬剤に準ずる。		1 元肥を過剰施用した場合や出穂期近くの追肥は穂いもちにかかりやすい。 2 粒剤の使用時期は、 オリゼメート粒剤 出穂3~4週間前 (収穫14日前まで) フジワン粒剤 出穂10~30日前 (収穫30日前まで) コラトップ粒剤5 出穂30~5日前まで
穂枯れ (ごま葉枯病菌)	○播種前 種子伝染性病害虫の欄参照 種子消毒用農薬一覧の頁参照 ○本田期 オリゼメート粒剤 3kg/10a  ブラシフロアブル 1,000倍 トライフロアブル 1,000倍	出穂3~4週間前 (収穫14日前まで) - 2  7-2 14-2	1 肥料切れのときに発生しやすいので、追肥を行い、稲体の栄養状態を適正に保つ。 2 酸欠の場合に発生しやすいので、中干しや間断灌漑を実施し、根の活力維持に努める。
もみ枯細菌病	○は種前 種子消毒用農薬一覧の頁参照 ○育苗期 出芽温度は30~32℃を守り、過湿を避ける。 ○本田期(穂ばらみ初期~乳熟期) ブラシフロアブル 1,000倍 ブラシ粉剤DL 4kg/10a バリダシン液剤5 1,000倍 オリゼメート粒剤 3kg/10a	7-2 7-2 14-5 移植活着後及び 出穂3~4週間前 (収穫14日前)-2	1 オリゼメート粒剤、ブラシフロアブルはいもち病にも有効である。 2 ブラシフロアブル、ブラシ粉剤DLは内穎褐変病にも有効である。
紋枯病	○幼穂形成期~穂ばらみ期 モンガリット粒剤 湛水散布 3kg/10a バリダシン液剤5 1,000倍 ○秋期(収穫後) 反転耕を行う。	30-2 14-5	1 過繁茂とならないように密植・過剰施肥を避ける。 2 薬剤は株元に十分散布する。
稲こうじ病	○出穂20~10日前 Zポルドー粉剤DL 3kg/10a ブラシ粉剤DL 4kg/10a ブラシフロアブル 1,000倍 モンガリット粒剤 湛水散布 3kg/10a トライフロアブル 1,000倍	出穂10日前-- 7-2 7-2 30-2 14-2	1 銅剤は薬害が発生しやすいので、散布量、散布時期を守る。 2 必ず出穂10日前までに散布する。 3 窒素肥料の過用を避け、遅効きにならないようにする。
白葉枯病	○田植直前 稲育苗期の病害虫農薬一覧の頁参照 ○穂ばらみ期 オリゼメート粒剤 3kg/10a	移植活着後及び 出穂3~4週間前 (収穫14日前)-2	1 暴風雨の後は発病しやすい。 2 窒素過多にならないようにする。
内穎褐変病	○穂ばらみ期~穂揃期 ブラシ粉剤DL 4kg/10a ブラシフロアブル 1,000倍	7-2 7-2	多発時の本病の防除には効果が劣ることがあるので注意する。

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
萎縮病 黄萎病	○は種前 1 刈り取り直後に耕起するか、ツマグロヨコバイの防除を徹底する。 2 冬期に畦畔・土手の枯草を処分する。 ○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○4月中旬～7月上旬 散布薬剤はツマグロヨコバイの欄を参照		地域一斉防除を行うことが望ましい。
縮葉枯病 黒すじ萎縮病	○は種前 1 冬期に畦畔・土手の枯草を処分する。 2 田植1か月前頃までに水田を耕起し、ヒメトビウカの生息密度を下げる。 ○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照		地域一斉防除を行うことが望ましい。
ニカメイチュウ (・第1世代) (・第2世代)	○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○第1世代(6月中旬～下旬)、 第2世代(8月中旬～下旬) スタークル粒剤 } 3kg/10a アルバリン粒剤 } エルサン乳剤 } 第1世代:1,500倍 } 第2世代:1,000倍 スミチオン乳剤 } 第1世代:2,000倍 } 第2世代:1,000倍	7-3 7-2 21-2	
ウンカ類 (・セジロウカ) (・トビイロウカ) (・ヒメトビウカ)	○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○8月上旬～出穂期 スタークル粒剤 } 3kg/10a アルバリン粒剤 } トレボン粒剤 } 2kg/10a トレボン粉剤DL } 3kg/10a アドマイヤー1粒剤 } 3kg/10a ダントツ粒剤 } 3kg/10a ダントツ水溶剤 } 4,000倍 スタークル顆粒水溶剤 } 3,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 }	7-3 21-3 7-3 7-2 7-3 7-3 7-3	トビイロウカは株元に注意し、1株に3頭以上の虫が認められた場合、早期防除を行う。
ツマグロヨコバイ	○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○8月下旬 スタークル粒剤 } 3kg/10a アルバリン粒剤 } アドマイヤー1粒剤 } 3kg/10a ダントツ粒剤 } 3kg/10a エルサン乳剤 } 2,000倍 トレボン粒剤 } 2kg/10a トレボン乳剤 } 2,000倍 アプロード水和剤 } 2,000倍 スタークル顆粒水溶剤 } 3,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 } ダントツ水溶剤 } 4,000倍	7-3 7-2 7-3 7-2 21-3 14-3 7-4 7-3 7-3	1 1株に30頭以上の虫が認められた場合、早期防除を行う。 2 アプロード水和剤は幼虫適用。散布時期が遅れると効果が低下する。

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
イネツトムシ	○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○7月下旬～8月中旬 パダン粒剤4 3kg/10a スミチオン乳剤 1,000倍	30-6 21-2	1 1㎡当り1頭以上の幼虫が認められた場合、手遅れにならないよう防除する。 2 野菜作付後等晩植のものや、晩生品種は発生が多くなるので注意する。
コブノメイガ	○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○7～8月頃 パダン粒剤4 3kg/10a トレボン乳剤 1,000倍	30-6 14-3	
フタオビコヤガ	○7～8月頃 スミチオン乳剤 4,000倍 トレボン粉剤DL 3kg/10a	21-2 7-3	
カメムシ類 (斑点米) ・クモヘリカメムシ ・アカヒゲホリ ・ミドリカスミカメ ・アサジカスミカメ ・ホソハラカメムシ ・トゲシラホシカメムシ	○6月～7月 畦畔や水田周辺雑草地の草刈りを行う。 ○穂揃い期、穂揃い後7～10日後 スタークル粉剤DL 3kg/10a アルバリン粉剤DL 3kg/10a スタークル粒剤 3kg/10a アルバリン粒剤 3kg/10a ダントツ粒剤 3kg/10a キラップ粒剤 3kg/10a スタークル豆つぶ 250g/10a ダントツ水溶剤 4,000倍 スタークル顆粒水溶剤 2,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 2,000倍 エクシードフロアブル 2,000倍 スミチオン乳剤 1,000倍 トレボン乳剤 2,000倍 エミリアフロアブル 1,000倍	7-3 7-3 7-3 14-2 7-3 7-3 7-3 21-2 14-3 7-2	1 出穂直前の除草はカメムシを本田に追い込んでしまうので、出穂10日前までに除草する。 2 水田内のヒエ、ホタルイは誘引源となるため結実前に除草する。 3 斑点米の原因となるため、出穂期以降、発生が認められた場合は、薬剤散布を2回行う。発生が続く場合は追加散布を行う。 4 粒剤はやや早めに散布する。
イネミスゾウムシ	○2月～3月 畦畔、土手の枯草を焼却する。 ○田植直前 稲育苗期の病害虫農業一覧の頁参照 ○移植時 パダンSG水溶剤 200g/10a ○田植後 なげこみトレボン 水溶性容器4個(200ml)/10a トレボン粒剤 2kg/10a	移植時-1 5葉期以降(収穫21日前)-3 21-3	1 田植期を揃え、できるだけ遅らせる。 2 成虫が2株当り1頭以上認められた場合、早期に防除する。 3 パダンSG水溶剤は所要量をペースト肥料に溶かし、側条施肥田植機で施用する。 4 水溶性容器剤は、藻ウキクサ等が多数浮遊している水田等及び稲が活着不良または軟弱徒長の場合には薬害を生じることがあるので使用しない。

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
イネドロオイムシ	○田植直前 稲育苗期の病害虫農薬一覧の頁参照 ○田植え後～7月下旬 スタークル粒剤 3kg/10a アルバリン粒剤 ) トレボン粒剤 2kg/10a なげこみトレボン 水溶性容器4個 (200ml)/10a エルサン乳剤 2,000倍 ダントツ水溶剤 4,000倍	7-3 21-3 5葉期以降 (収穫21日前)-3 7-2 7-3	1 25株当り12.5～20の卵塊が見られた場合、早期に防除する。 2 水溶性容器剤は、藻ウキクサ等が多数浮遊している水田等及び稲が活着不良または軟弱徒長の場合には薬害を生じることがあるので使用しない。
イネヒメ ハモグリバエ イネ ハモグリバエ	○田植直前 稲育苗期の病害虫農薬一覧の頁参照 ○田植直後(6月上～下旬) スミチオン乳剤 イネヒメハモグリバエ:2,500倍 イネハモグリバエ:2,000倍	21-2	
イネゾウムシ	○田植直後 トレボン粒剤 2kg/10a	21-3	
イナゴ類 (コハネナガ ハネナガ)	○発生初期 1 畦畔、土手の雑草管理を徹底する。 2 薬剤散布 トレボン乳剤 2,000倍	14-3	育苗箱施薬は稲育苗期の病害虫農薬一覧の頁参照。
貯穀害虫 (コクゾウ ナガシクイ コクストモキ等)	○貯蔵時 1 貯蔵庫を清掃する。 2 穀物を十分乾燥する。		

山梨県稲奨励品種の病害虫抵抗性一覧

品種名		病害虫名						
		葉いもち	穂いもち	白葉枯病	紋枯病	ごま葉枯病	縞葉枯病	イネカラバエ
うるち米	コイヒメ	中	中	中	—	—	罹病性	—
	五百川	弱	弱	—	—	—	罹病性	—
	ひとめぼれ	弱	中	中～強	—	—	罹病性	—
	コシヒカリ	弱	弱	中	強	強	罹病性	中～強
	つや姫	やや強	中	やや強	中	—	罹病性	—
	にじのきらめき	中	やや強	中	やや弱	—	抵抗性	—
	農林48号	弱	弱	中	中	中～強	罹病性	—
	あさひの夢	中	強	中	中	中	抵抗性	—
	ヒノヒカリ	弱～中	弱～中	弱～中	中	—	罹病性	—
酒米	夢山水	やや強	やや強	中	中	—	罹病性	中
	ひとごち	中	中	やや強	中	—	罹病性	—
	玉栄	中	弱	弱	弱	—	罹病性	—
	吟のさと	弱～中	弱～中	弱～中	中	—	罹病性	—
もち米	ヒメノモチ	中～強	中～強	弱	中～強	—	罹病性	強
	こがねもち	弱～中	中	弱	強	—	罹病性	—
	きぬはなもち	やや強	強	やや強	中	—	抵抗性	—
	朝紫	強	弱～中	弱～中	弱	—	罹病性	—

## 稲育苗管理の留意点

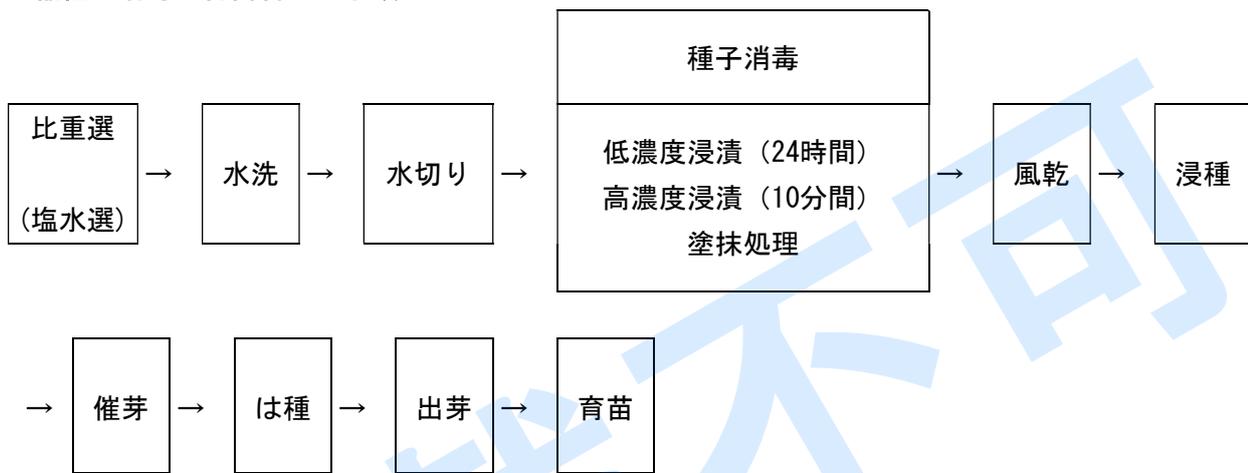
ばか苗病やもみ枯細菌病等の種子伝染性病害は、本田において発病すると有効な防除手段が少ないことから、育苗時の防除対策の徹底が重要である。

種子伝染性病害虫の発生防止と健苗育成のため、優良種子の使用、比重選の徹底とともに、下記手順にもとづき、種子消毒と適正な育苗管理を徹底する。

### 1 対象病害虫

ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病、もみ枯細菌病、褐条病、苗立枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

### 2 稲種子消毒と育苗管理の手順



#### 〔採種〕

- ・採種圃産種子による種子更新を行う。
- ・種子伝染性病害虫の発生した圃場及び周辺圃場からの採種は避ける。

#### 〔比重選（塩水選）〕

- ・重度感染粒の除去と発芽の均一化に有効なため必ず実施する。
- ・水中での感染防止のため、比重選に使用した塩水等は繰り返して使用しない。
- ・比重選に使用した用具は、使用ごとに資材消毒を行う。
- ・消毒済み種子は比重選を行わず浸種から始める。

区分	比重	水10L当り食塩の量	水10L当り硫安の量
うるち種	1.13	2.1kg	2.8kg
もち種	1.08	1.3kg	1.6kg

注) 溶液の比重は比重計で確認する。

## 〔水洗・水切り〕

- ・水洗を十分に行い、塩分を取り除く。
- ・水切りを十分に行う。

## 〔種子消毒〕

- ・ポリエチレン製網袋等の目の粗いものを用い、薬液が行き渡るようにもみの量は最大でも7分目程度とする。
- ・種子伝染性病害虫の発生実態に応じた薬剤の選択を行う。
- ・水和剤による薬液の調整は、最初、少量の水またはぬるま湯で練って糊状にした後、所定量の水に攪拌しながら溶かす。
- ・防除効果を高めるため、薬液の温度は15℃以下にならないようにする。
- ・薬液の量は、種子もみ容量の約1.2倍とする（種子もみ1kgに対して薬液約2Lの割合）。
- ・低濃度浸漬法の場合は、薬液の使用回数は1回とする。2回以上の使用では効果が低下する。
- ・高濃度浸漬法の場合は、同一薬液の繰り返し使用は7回までとする。
- ・消毒中に2～3回袋を上下に振とうするか薬液を攪拌し、薬液が種子に行き渡るようにする。
- ・エコホープは、処理時期や混用・体系薬剤により、効果が劣ったり、発芽不良や生育不良が生じるため、薬剤の特性をよく理解し使用する。

## 〔風乾〕

- ・風通しのよい日陰で行い、種子もみの表面が乾いて薬剤が固着するまで風乾する。
- ・エコホープは風乾を行わず、水切り後、速やかに次の作業に移る。

## 〔消毒残さ液の処理〕

- ・消毒後の残液は、河川、灌漑水路、湖沼、池等に絶対に流入しないよう適正に処理する。
- ・廃液処理の手順は次を参考にする。  
種子消毒終了→活性炭を添加（廃液100L当り2kg）→攪拌（10分間）・放置（30分）→凝集剤添加→攪拌（10分間）→ろ過→ろ過・残さの処理（処理後の上澄液及びろ液の排水、残さは産業廃棄物処理業者へ処分を委託）

## 〔浸種〕

- ・浸種は、発芽に必要な水分を供給し、もみ殻中の発芽阻害物質を除去することにより発芽を揃える目的で行う。
- ・停滞水中で、必ず清水（水道水、井戸水）で行う。
- ・水量は種子もみ容量の2倍程度とする（種子もみ1kgに対して水約3.5Lの割合）。
- ・種子消毒効果を高めるため、浸種開始後2～3日間は水を交換しない。その後は1～2日おきに水を交換し、酸素の供給を促す。
- ・10℃で10日間、15℃で5日間を目安とする。10℃以下の低温に浸種した場合は、覚醒した休眠が深まる場合がある。

## 〔催芽〕

- ・30℃で1～2日間行い、催芽揃いのよい状態（はとむね状態）にする。
- ・高温は細菌性病害の発病を助長するので、温度は30℃を超えないように注意する。

### 〔は種〕

- ・育苗資材の消毒を徹底して行う。
- ・床土はpH4.5～5.5程度とする。pHが高いともみ枯細菌病が発生しやすく、pHが低いと苗立枯細菌病が発生しやすい。
- ・床土は人工培土や山土（赤土）等のきれいな土壌を使用する。
- ・種子伝染性病害や苗立枯病等の発生実態に応じた育苗箱処理剤の選択を行う。苗立枯病については病原菌によって有効な薬剤が異なるので注意する。
- ・目標とする苗の種類や適応地域に合ったは種量や施肥量を厳守する（表1）。

### 〔出芽〕

- ・高温は細菌性病害の発病を助長するので、32℃を超えないように注意する（30～32℃厳守）。

### 〔育苗〕

- ・薬剤を用いて育苗施設の消毒を徹底して行う。
- ・緑化期以降は昼間25℃以上、夜間10℃以下にならないように管理する。そのため、保温資材の開閉は細めに行う。
- ・育苗中の高温や多湿、過灌水は発病を助長するため注意する。
- ・地域での例年の病虫害発生状況等を参考に、箱施用による長期持続型殺虫殺菌剤の必要性を判断し、対象病虫害に対する薬剤を選択する。

表1 苗の種類と適応地域別育苗基準

苗の種類	適応地域	は種量 (箱当り催芽もみ)	10a当り 箱数	施肥量(成分g/箱)		
				N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
乳苗	平坦地・中間地	220～240g(2.2～2.4合)	14～16	専用人工培地(マット)		
稚苗	平坦地	160～180g(1.6～1.8合)	16～18	1.0	2.0	1.5
	中間地	160～180g	16～20	1.5	3.0	2.0
中苗	平坦地	120～140g(1.2～1.4合)	22～24	0.5	2.0	1.5
	中間地	120～140g	22～26	1.0	2.0	1.5
	高冷地	100～120g(1.0～1.2合)	24～30	2.0	3.0	2.5

注) 100g=180cc=1合

#### \* 高密度播種栽培の留意点

- ・は種量は1箱当り乾籾250g～300gで、10a当りの箱数を12～13枚に低減できる。
- ・苗密度が高く徒長しやすいため、温度管理や遮光管理等、育苗の基本技術の励行に努める。
- ・ムレ苗や老化苗が発生しやすいため、育苗期間20～25日で移植できるよう育苗計画を立てる。
- ・移植時に育苗箱施用剤を処理する場合、薬剤の登録内容を確認の上、10a当りの育苗箱数に応じて剤の使用量が1kg/10aとなるよう、育苗箱1箱当りの薬量を50から100gまでの範囲で調整する。または、本田防除を行うか専用の側条施薬機を利用する。

## 温湯処理による稲の種子消毒法

対象病虫害：種子伝染性病虫害（ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病、  
イネシンガレセンチチュウ）

処理方法：対流型の温湯処理機を用いて、乾燥した種もみをうるちは 60℃、もちは 58℃の温湯にそれぞれ 10～15 分間浸漬し、直ちに流水で冷やす。

\* 農林 48 号については、もちと同じ温湯温度とする。

- 留意点：① 処理温度が低いあるいは処理時間が短い場合、病虫害への効果が低下する。一方、温度が高いあるいは処理時間が長い場合は、種子の発芽力が低下するため、温度を一定に保つ専用の温湯処理機を利用し、処理時間を厳守する。
- ② 古い種子や登熟が悪い種子は、温湯消毒により発芽率が低下する傾向にあるので、前年採種した健全種子を使用するとともに、塩水選を必ず行う。
- ③ 塩水選との連続作業で行う場合は、塩水選後直ちに清水（水道水、井戸水）で洗浄してから 30 分以内に、温湯処理する。なお、30 分以内に処理できない場合は、種子を完全に乾燥させてから行う（水分 15%以下、塩水選後 30 分以上経過して湿った状態の種もみを温湯処理すると発芽障害が生じるため）。
- ④ 防除効果を高めるため、処理する種もみ量、処理時にもみ袋を上下に攪拌する等、温湯処理機利用にあたっての注意事項を十分に理解してから実施する。
- ⑤ 温湯処理は、殺菌剤と同等の菌密度効果はあるが、は種量が多すぎる場合や床土消毒、育苗温度管理や水管理が不適切な場合は、病害が多発する可能性があるため健苗育成に努める。
- ⑥ 処理後の種もみを長期間保存する場合は、十分風乾してから冷暗室で保存する。15℃で 6 か月は保存できる。

稲病害虫の種子消毒用農薬一覧

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	使用時期	使用濃度 使用方法	適用病害虫名									
							いもち病	ばか苗病	苗立枯病	ごま葉枯病	もみ枯細菌病	褐条病	苗立枯細菌病	イネシנגレセンチュウ		
スポルタック スターナSE	3	プロクロラズ	1	1	浸種前	200倍 24時間浸漬	○	○	○	○	○	○				
	31	オキシリニック酸		1		20倍 10分間浸漬										
テクリードC フロアブル	3	イプロナゾール	1	1	浸種前	200倍 24時間 種子浸漬										
	M1	水酸化第二銅		—		20倍 10分間 種子浸漬	○	○	※a	○	○	○	○			
						原液5ml /乾燥種籾1kg 種子塗抹処理										
エコホープDJ	—	トリコデルマ アトロビリデ	—	—	浸種前～ 催芽前	200倍 24～48時間 種子浸漬	○	○	○※b	○	○	○				
					催芽時	200倍 24時間 種子浸漬										
スミチオン乳剤	1B	MEP	1	3※1	は種前	1000倍 6～72時間浸漬										○

※1 種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内

※a リゾープス菌、トリコデルマ菌適用 ※b リゾープス菌適用

### 稲苗立枯病の病原菌の種類と適用農薬

病原菌の種類 農薬名	FRAC コード	使用方法	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾクトニア菌	トリコデルマ菌	リゾープス菌	白絹病菌
タチガレン粉剤	32	育苗箱土壌に均一に混和する	○	○				
タチガレン液剤	32	土壌灌注又は灌注	○	○				
タチガレースM粉剤	32 4	育苗箱土壌に均一に混和	○	○				
タチガレースM液剤	32 4	土壌灌注	○	○				
ダコレート水和剤	1 M5	灌注		○		○	○	
バリダシン液剤5	U18	灌注			○			○
ダコニール1000	M5	土壌灌注					○	

※ すべて稲（箱育苗）登録。

### 稲苗立枯病の病原菌の種類と特徴

病原菌	地際部のカビの有無	主な症状	発生条件
フザリウム菌	あり 地際部・籾に 白～淡紅色のカビ	発芽後に生育不良となり根の先端や地上部が褐変腐敗する。	過湿、乾燥、高pH
トリコデルマ菌	あり 地上部は白いカビ 籾は白～青緑のカビ	籾の腐敗。苗の黄化枯死	低pH、出芽時の高温、緑化期の低温
リゾープス菌	あり 表面全体に 白～灰色のカビ	根の先端が異常に膨らみ生育が不揃いとなり、腐敗枯死する。	出芽時の高温、緑化期の低温、過湿
リゾクトニア菌	あり 表面全体に クモの巣状のカビ	苗がカビに覆われ、溶けるように枯死	出芽時の高温
白絹病菌	あり 地際や根に 菌糸が絡み合う	白い菌糸の塊ができ、褐色球形菌核となる。苗は黄緑色となり、萎凋枯死する。	高温、過湿
ピシウム菌	なし	発芽直後：幼根が水浸状の褐変腐敗 2～3葉期：淡黄褐色となり萎縮する。	高pH、緑化期の低温、過湿

稲育苗期の病害虫農薬一覧 ①

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	使用時期	育苗箱 (30×60×3cm 使用土壌約5L) 1箱当り施用量	適用病害虫名								
							いもち病	白葉枯病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	苗立枯病	苗立枯細菌病	ムレ苗防止	ウンカ類	
タチガレース M粉剤	32	ヒドロキシ イソキサゾール	1	3※1	は種前	6～8g					○ ※a		○		
	4	メタラキシルM		4※2											
タチガレース M液剤	32	ヒドロキシ イソキサゾール	1	3※1	は種時又は 発芽後	500～1000倍 500ml					○ ※a		○		
	4	メタラキシルM		4※2	は種時	1000倍 1L					○ ※a		○		
タチガレン粉剤	32	ヒドロキシ イソキサゾール	1	3※1	は種前	4～8g							○		
						3～6g					○ ※a				
タチガレン液剤	32	ヒドロキシイソ キサゾールカリ ウム	2	3※1	は種時又は 発芽後	1000倍1L 又は 500～1000倍500ml					○ ※a		○		
フジワン粒剤	6	イソプロチオラ ン	1	3※3	は種前	15g							○		
					苗の緑化始期	25～50g								○	
					苗の緑化期～ 移植直前	50～75g	○								
						75gと本田4～5kg/10a の体系処理									○ ※b
オリゼメート粒剤	P2	プロベナゾール	1	2※4	移植3日前～ 移植前日	20～30g	○	○	○						
バリダシン液剤5	U18	バリダマイシン	1	6※5	は種時～ 発病初期	1000倍 500ml					○ ※c				
ダコレート水和剤	M5	TPN	2	2	は種時～緑化期 (は種14日後まで)	400～600倍500ml 又は 800～1200倍1L					○ ※d				
	1	ベノミル	1	2 (種子処理 1回以内、 床土混和 1回以内)	は種時	400倍 500ml	○ ※e								
ダコニール1000	M5	TPN	2	2	は種時～緑化期 (は種14日後まで)	500～1000倍 500ml					○ ※f				
						1000～2000倍 1L									

※1 移植前の土壌混和は1回以内、移植前の土壌灌注は2回以内

※2 移植前の土壌混和は1回以内、育苗箱への灌注は1回以内、本田では2回以内

※3 移植前は1回以内、本田では2回以内 ※4 移植時までの処理は1回以内 ※5 育苗箱灌注は1回以内、本田では5回以内

※a フザリウム、ピシウム菌適用 ※b トビイロウンカ適用 ※c 白絹病菌、リゾクトニア菌適用

※d リゾープス、トリコデルマ、フザリウム菌適用 ※e 苗いもち適用 ※f リゾープス菌適用

(注意事項) 上記使用量は、同一薬剤でも対象病害虫により異なる場合があるので、使用時には防除病害虫・使用量を確認すること。



麦類病虫害防除農薬一覧

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	適用病虫害名													
					うどんこ病	さび病	赤さび病	赤かび病	裸黒穂病	なまぐさ黒穂病	斑葉病	雲形病	条斑病	株腐病	縞萎縮病	黄斑病	アブラムシ類	
トップジンM水和剤	1	チオファネートメチル	(小麦) 3※1	4※2	○			○										
			(麦類(小麦を除く)) 3※3	3※4	○			○										
ホーマイ水和剤	1	チオファネートメチル	(小麦) 1	4※5														
			(麦類(小麦を除く)) 1	3※4						○	○							
	M3	チウラム	(小麦) 1	1														
			(麦類(小麦を除く)) 1															
ベンレートT水和剤20	1	ベノミル	(小麦) 1	4※6														
			(麦類(小麦を除く)) 1	1						○	○	○	○	○				
	M3	チウラム	(小麦) 1	1														
			(麦類(小麦を除く)) 1															
バンタック粉剤	7	メプロニル	2	3※7		○												
バンタック水和剤75	7	メプロニル	2	3※7		○												
ストロビーフロアブル	11	クレソキシムメチル	(小麦) 3	3	○		○	○										
			(麦類(小麦を除く)) 3		○		○	○										
トリフミン水和剤	3	トリフルミゾール	3	3 (種子粉衣1回以内)	○													
			1 (は種前)						○	○	○							
シルバキュアフロアブル	3	テブコナゾール	(小麦) 2	3※8	○		○	○										
			(小麦) 1 (根雪前)								○							
			(大麦) 2	2	○			○										
チルト乳剤25	3	プロピコナゾール	(小麦) 3※9	5※10	○		○	○		○								○
			(大麦) 1	1	○			○			○							
イオウフロアブル	M2	硫黄	—	—	○		○	○										
ダコソイル	M5	T P N	(秋播栽培) 1	1														○
スミチオン乳剤	1B	M E P	(小麦) 1	1														○
			(大麦) 1															
モスピラン顆粒水溶剤	4A	アセタミプリド	2	2														○

※1 出穂期以降は2回以内

※2 (小麦)種子への処理は1回以内、散布及び無人航空機散布は合計3回以内、出穂期以降は2回以内

※3 出穂期以降は1回以内

※4 (麦類(小麦以外))種子への処理は1回以内、出穂期以降は1回以内

※5 (小麦)種子への処理は1回以内、散布及び無人ヘリ散布は合計3回以内、出穂期以降は2回以内

※6 (小麦)種子への処理は1回以内、は種後は3回以内

※7 根雪前は2回以内、融雪後は2回以内

※8 根雪前は1回以内、融雪後は2回以内

※9 うどんこ病、赤さび病、赤かび病、黄斑病は3回以内、なまぐさ黒穂病は2回以内

※10 根雪前は2回以内、春期以降は3回以内

麦類

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
うどんこ病	○穂ばらみ期～出穂期 イオウフロアブル 400倍 トリフミン水和剤 2,000倍 トップジンM水和剤 2,000倍  ストロビーフロアブル 3,000倍	発病前～発病初期―― 14-3 小麦 14-3 (出穂期以降2回) 麦類 30-3 (小麦除く)(出穂期以降1回) 14-3	適正な種量、施肥量により生育過剰にならないようにする。
さび病	○穂ばらみ期～出穂期 バンタック粉剤 3kg/10a バンタック水和剤75 1,500倍	30-2 30-2	
赤さび病	○穂ばらみ期～出穂期 イオウフロアブル 400倍 ストロビーフロアブル 3,000倍	発病前～発病初期―― 14-3	
赤かび病	○穂揃期(開花期) イオウフロアブル 800倍 トリフミン水和剤 2,000倍 トップジンM水和剤 1,500倍  ストロビーフロアブル 3,000倍 シルバキュアフロアブル 2,000倍	発病前～発病初期―― 14-3 小麦 14-3 (出穂期以降2回) 麦類 30-3 (小麦除く)(出穂期以降1回) 14-3 小麦 7-2 大麦 14-2	1 発生ほ場からの採種は行わない。 2 降雨が続いた時に多発するので、雨の合間に散布するように心がける。 3 収穫後の発生を防ぐため、子実は速やかに乾燥させる。
裸黒穂病	○は種前(種子消毒) 1 温湯浸漬、冷水温湯浸漬 温湯処理消毒の頁参照 2 種子粉衣 ベンレートT水和剤20 乾燥種子重量の0.5% トリフミン水和剤 種子重量の0.5% ○生育期 病穂は早期に抜き取り、適切に処分する。	は種前-1 は種前-1	
から黒穂病	○は種前 斑葉病の防除を徹底する。		
なまぐさ黒穂病	○は種前(種子消毒) 1 温湯浸漬、冷水温湯浸漬 温湯処理消毒の頁参照 2 薬剤消毒 (1)種子粉衣 ホームイ水和剤 種子重量の0.5% ベンレートT水和剤20 乾燥種子重量の0.5% トリフミン水和剤 種子重量の0.5% (2)種子浸漬 ホームイ水和剤 200倍 6~24時間種子浸漬 ベンレートT水和剤20 200倍 6~24時間種子浸漬	は種前-1 は種前-1 は種前-1 は種前-1 は種前-1	
斑葉病	○は種前(種子消毒) 1 温湯浸漬、冷水温湯浸漬 温湯処理消毒の頁参照 2 種子消毒 ベンレートT水和剤20 200倍 6~24時間種子浸漬 3 種子粉衣 ホームイ水和剤 種子重量の0.5% ベンレートT水和剤20 乾燥種子重量の0.5% トリフミン水和剤 種子重量の0.5%	は種前-1 は種前-1 は種前-1	

麦類

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
雲形病	○は種前（種子消毒） 種子粉衣 ベンレートT水和剤20 乾燥種子 重量の0.5%	は種前-1	
条斑病	○は種前 1 種子消毒 ベンレートT水和剤20 200倍 6~24時間種子浸漬 2 種子粉衣 ベンレートT水和剤20 乾燥種子 重量の0.5% 3 は種期を適期の範囲で遅らせる。 4 小麦の連作を避け、大麦又は裸麦を栽培する。	は種前-1 は種前-1	本病は土壌伝染、種子伝染するほか、り病麦でも伝染する。
株腐病	○は種前 1 種子消毒 アミスター20フロアブル 原液8ml 乾燥種子1kg 2 種子粉衣 ベンレートTコート 乾燥種子 重量の0.5%	は種前-1 は種前-1	アミスターは小麦、ベンレートは大麦のみの登録
縞萎縮病 (萎縮病)	○は種前 1 耐病性品種を用いる。 2 発生地では同一麦種を作付けしない。 3 は種期を適期の範囲で遅らせる。 4 麦類萎縮病の発生地は連作を避ける。 5 薬剤処理 ダコソイル 全面施用土壌混和20kg/10a 作条施用土壌混和10kg/10a	は種前-1 は種前-1	1 発病ほ場で使用した機械等はよく洗浄する。 2 ダコソイルは麦類(秋播栽培)登録。
立枯病	○は種前 1 発生したら2年以上他作物を栽培する。 2 は種期を適期の範囲で遅らせる。 3 りん酸、堆肥を多く施す。 ○生育期 肥料切れをしないようにする。		
アブラムシ類 (・ムギミドリ アブラムシ ・ムギクビレ アブラムシ)	○発生初期 スミチオン乳剤 1,000倍 モスピラン顆粒水溶剤 4,000倍	小麦 大麦 7-1 麦類 14-1 (小麦、大麦除く) 7-2	
貯穀害虫 (・コクゾウ ・カシキイ ・コクストモドキ等)	○貯蔵時 1 貯蔵庫を清掃する。 2 穀物を十分乾燥する(水分10%以下)。		

温湯処理消毒による麦類の種子消毒法

対象病害虫： 種子伝染性病害（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病、斑葉病）

処理方法：

【温湯浸漬法】

- ・開始時の湯の温度は、小麦46℃、大麦42℃とし、湯の温度が1時間に1~2℃下がるようにして、6~10時間浸漬する。

【冷水温湯浸漬法】

- ・小麦：冷水（水温10~14℃）に5~6時間浸漬した種子を予備浸漬として50℃の温湯に1分間浸漬し温め、直ちに55℃の温湯に5分間浸漬した後、速やかに冷水で冷やす。
- ・大麦：冷水（水温10~14℃）に5~6時間浸漬した種子を予備浸漬として47℃の温湯に1分間浸漬し温め、直ちに52℃の温湯に5分間浸漬した後、速やかに冷水で冷やす。

留意点：

- ① 処理後は直ちに薄く広げ、日陰干しにする。
- ② 温度と時間を誤ると発芽不良の要因となるため、温度、時間は厳守する。
- ③ 温湯処理機等を利用し、水温を低下させずに処理する場合は、予備浸漬を省略することができる。

茶病害防除農薬一覧

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	適用病害名							
					炭疽病	網もち病	もち病	輪斑病	白紋羽病	新梢枯死症	褐色円星病	赤焼病
ベンレート水和剤	1	ベノミル	1	1	○			○	○		○	
アミスター20フロアブル	11	アゾキシストロビン	3	3	○		○	○		○※a		
トリフミン水和剤	3	トリフルミゾール	3	3	○		○					
オンリーワンフロアブル	3	テブコナゾール	2	2	○	○	○			○	○	
Zボルドー	M1	塩基性硫酸銅	—	—	○	○	○					○
ダコニール1000	M5	T P N	1	1	○	○	○	○		○※a	○	
NCS	8F	カーバム	1	1					○			

※a 輪斑病菌による新梢枯死症適用

茶害虫防除農薬一覧

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	適用害虫名											
					カンザワハダニ	チャノホコリダニ	チャノホソガ	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ・コカクモンハマキ	チャノミドリヒメヨコバイ	クワシロカイガラムシ	ツマグロアオカスミカメ	コミカンアブラムシ	ヨモギエダシヤク	チャノキイロアザミウマ	チャトゲコナジラミ
スミチオン乳剤	1B	MEP	1	1		○		○※a								
スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	4A	ジノテフラン	2	2		○			○	○	○				○	
バロックフロアブル	10B	エトキサゾール	1	1	○											
コテツフロアブル	13	クロルフェナピル	2	2	○	○		○※b	○				○※c	○	○	○
パダンSG水溶剤	14	カルタップ	1	1			○		○						○	
マッチ乳剤	15	ルフェヌロン	1	1			○	○※b,d						○	○	
アプロード水和剤	16	ブプロフェジン	2	2					○※e	○※f						○
アプロードエース フロアブル	16 21A	ブプロフェジン フェンピロキシメート	2	2 2		○	○		○	○※g						○
ダニトロンフロアブル	21A	フェンピロキシメート	2	2	○	○	○		○	○						
ウララDF	29	フロニカミド	1	1					○		○	○			○	○
グレーシア乳剤	30	フルキサメタミド	1	1		○	○	○※b,d	○					○	○	○
ハーベストオイル	—	マシン油	—	—	○					○						○

※a コカクモンハマキ適用 ※b チャノコカクモンハマキ適用 ※c シャクトリムシ類適用

※d チャハマキ適用 ※e 幼虫適用 ※f 若齢幼虫適用 ※g カイガラムシ類適用

## 茶

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
炭疽病	○7月上中旬二番茶摘採後に浅刈りを行うか、7月半ばに二番茶摘採面で整枝を行う。 ○6月上中旬(二番茶開葉期)、 7月中下旬(三番茶開葉期) オンリーワンフロアブル 3,000倍 トリフミン水和剤 2,000倍 ダコニール1000 1,000倍 アミスター20フロアブル 2,000倍 Zボルドー 400倍	摘採7日前-2 摘採14日前-3 摘採10日前-1 摘採14日前-3 摘採7日前--	
網もち病	○7月中下旬(三番茶開葉期)、 8月下旬~9月上旬(三番茶開葉期) オンリーワンフロアブル 2,000倍 ダコニール1000 1,000倍 Zボルドー 500倍	摘採7日前-2 摘採10日前-1 摘採7日前--	
もち病	○6月上中旬(二番茶開葉期)、 7月中下旬(三番茶開葉期)、 8月下旬~9月上旬(秋芽開葉期) オンリーワンフロアブル 3,000倍 トリフミン水和剤 1,500倍 ダコニール1000 1,000倍 アミスター20フロアブル 2,000倍 Zボルドー 500倍	摘採7日前-2 摘採14日前-3 摘採10日前-1 摘採14日前-3 摘採7日前--	
輪斑病	○7月上旬(二番茶摘採直後) ダコニール1000 1,000倍 アミスター20フロアブル 2,000倍	摘採10日前-1 摘採14日前-3	1 摘採後の時間がたつほど防除効果は低下する。 2 二、三番茶後の多発した園では、秋整枝直後にも薬剤散布を行い、菌の密度を下げる。
白紋羽病	○発病跡地植付前 1 土壤消毒(土壤消毒の頁参照) NCS 3ml/穴 2 苗消毒 ベンレート水和剤 2,000倍 苗木根部24時間浸漬	植付前-1 --1	1 NCSは被害株と隣接株(健全に見えても根が侵されていることが多い)を取った跡地に注入する。 2 NCSは、30cm間隔の千鳥状に深さ約15~50cmの穴をあけて注入後、ビニール等で7~10日間被覆する。
新梢枯死症 (輪斑病菌による)	○二、三番茶の萌芽時 ダコニール1000 1,000倍 アミスター20フロアブル 2,000倍	摘採10日前-1 摘採14日前-3	1 萌芽から開葉期にかけて、包葉などが脱落したときに生じる傷口から感染しやすいので、薬剤散布を徹底する。 2 輪斑病が多発した茶園で発生しやすいので、輪斑病の防除を徹底する。
新梢枯死症	オンリーワンフロアブル 2,000倍	摘採7日前-2	
褐色円星病	○7月中下旬(三番茶開葉期) オンリーワンフロアブル 3,000倍	摘採7日前-2	
赤焼病	○10月中下旬、2月下旬~3月上旬 Zボルドー 500倍	摘採7日前--	1 幼木園では防風措置をする。 2 銅剤は1か月以内に連続して散布すると薬害を生じることがある。

茶

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項	
カンザワハダニ	○3月上中旬(萌芽前)、 4月上旬(一番茶萌芽期)、 5月中下旬(一番茶摘採後)、 7月上中旬(二番茶摘採後)、 11月上旬(越冬前) ダニトロンフロアブル 1,000倍 コテツフロアブル 2,000倍 バロックフロアブル 3,000倍 ハーベストオイル 150倍	摘採7日前-2 摘採7日前-2 摘採14日前-1 発芽前又は摘採直後-	1 凍霜害のあった場合は多発しやすいので、事後の散布を徹底する。 2 11月と萌芽前防除を徹底する。	
チャノホコリダニ	○8月~9月 ダニトロンフロアブル 1,000倍 コテツフロアブル 2,000倍 アプロードエースフロアブル 1,000倍 グレーシア乳剤 3,000倍	摘採7日前-2 摘採7日前-2 摘採14日前-2 適採14日前-1		
チャノホソガ	○6月上中旬(二番茶開葉期)、 7月中下旬(三番茶開葉期)、 8月下旬~9月上旬(秋芽開葉期) スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 マッチ乳剤 スミチオン乳剤 アプロードエースフロアブル パダンSG水溶剤 ダニトロンフロアブル グレーシア乳剤	2,000倍 2,000倍 3,000倍 1,000倍 1,000倍 1,500倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	摘採7日前-2 摘採7日前-1 摘採21日前-1 摘採14日前-2 摘採10日前-1 摘採7日前-2 適採14日前-1	散布は、手遅れにならないよう三角巻葉前に行う。
チャノコカクモンハマキ チャハマキ コカクモンハマキ	○4月中下旬 交信かく乱剤利用 (合成フェロモン剤を利用した害虫防除の頁を参照) 5月中旬(一番茶摘採後)、 7月上中旬(二番茶摘採後)、 8月中下旬(三番茶生育期)、 10月中下旬(秋整枝後) マッチ乳剤 3,000倍 コテツフロアブル 2,000倍 スミチオン乳剤 1,000倍 グレーシア乳剤 2,000倍	摘採7日前-1 摘採7日前-2 摘採21日前-1 適採14日前-1	1 成虫発生ピーク後の7月上旬(第2世代幼虫)及び8月中旬(第3世代幼虫)の防除を徹底する。 2 ふ化直後の若齢幼虫の適期に防除する。 3 発生の多い場合は、5~7日おき2回散布する。 4 マッチ乳剤、グレーシア乳剤はチャノコカクモンハマキ及びチャハマキ適用、コテツフロアブルはチャノコカクモンハマキ適用。スミチオン乳剤はコカクモンハマキ適用。	

## 茶

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
チャノミドリ ヒメヨコバイ	○6月上中旬(二番茶開葉期)、 7月下旬(三番茶開葉期)、 8月中旬～9月中旬(三番茶、秋芽生育期) スタークル顆粒水溶剤 } 2,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 } パダンSG水溶剤 1,500倍 アプロードエースフロアブル 1,000倍 コテツフロアブル 2,000倍 ダニトロンフロアブル 1,000倍	摘採7日前-2 摘採10日前-1 摘採14日前-2 摘採7日前-2 摘採7日前-2	
クワシロ カイガラムシ	○5月中下旬、7月中下旬、9月中下旬 アプロード水和剤 1,000倍 アプロードエースフロアブル 1,000倍 ダニトロンフロアブル 1,000倍	摘採14日前-2 摘採14日前-2 摘採7日前-2	1 防除は幼虫発生時期を重点に枝幹に十分かかるよう散布量を多くする。 2 被害が大きい時は、一番茶後、中切りを行ってから防除すると効果が高い。 3 アプロードエースフロアブルはカイガラムシ類適用、アプロード水和剤は若齢幼虫適用。
ツマグロアオ カスミカメ	○4月上中旬(一番茶萌芽期～開葉期)、 6月上中旬(二番茶開葉期) スタークル顆粒水溶剤 } 2,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 } ウララDF 2,000倍	摘採7日前-2 摘採7日前-1	
コミカン アブラムシ	○4月中下旬(一番茶生育期) スタークル顆粒水溶剤 } 2,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 } ウララDF 2,000倍	摘採7日前-2 摘採7日前-1	
ヨモギ エダシャク	○7月～8月 マッチ乳剤 3,000倍 コテツフロアブル 2,000倍	摘採7日前-1 摘採7日前-2	1 若齢幼虫期を重点に防除する。 2 コテツフロアブルはシヤクトリムシ類登録。
チャノキイロ アザミウマ	○6月上中旬、7月中下旬、9月上旬～下旬 スタークル顆粒水溶剤 } 2,000倍 アルバリン顆粒水溶剤 } マッチ乳剤 3,000倍 コテツフロアブル 2,000倍 パダンSG水溶剤 1,500倍	摘採7日前-2 摘採7日前-1 摘採7日前-2 摘採10日前-1	
チャトゲ コナジラミ	○5月～10月 裾刈りを行い、幼虫の寄生葉を除去する ○5月下旬～6月上旬、7月下旬～8月上旬、10月中下旬 コテツフロアブル 2,000倍 アプロードエースフロアブル 1,000倍 ○1月～2月 ハーベストオイル 100倍	摘採7日前-2 摘採14日前-2 10月～3月--	1 薬液は裾部から茶株頂上部へ向けて散布する。 2 多発した場合は、一番茶摘採後に台下げを実施し、寄生葉を除去する。
ネグサレ センチュウ	○植付前 土壌消毒(土壌消毒の頁参照)		土壌のセンチュウ生息密度、根の被害の診断を行った後、防除する。

桑病虫害防除農薬一覧

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	該成分を 含む農薬の 総使用回数	適用病虫害名								
					縮葉細菌病	枝軟腐病	ヒシモンヨコバイ	クワシロカイガラムシ	カミキリムシ類	アメリカシロヒトリ	クワノメイガ	ハダニ類	
アグリマイシン-100	41	オキシテトラサイクリン	3	3	○								
	25	ストレプトマイシン硫酸塩		—									
ヨネポン	M1	ノニルフェノールスルホン酸銅	5	5	○	○							
エルサン乳剤	1B	PAP	4	4			○	○	○		○		
トラサイドA乳剤	1B	マラソン	6	6					○				
	1B	MEP		6									
アプロード水和剤	16	ブプロフェジン	4	4			○※a						
モレスタン水和剤	UN M10	キノキサリン系	10	10									○
石灰硫黄合剤	UN	石灰硫黄合剤	—	—				○※b					
バイオリサ・カミキリ	—	ボーベリアブロンニアティ	—	—					○※c				
トモノールS	—	マシン油	—	—				○					
スプレーオイル	—	マシン油	—	—				○					

※a 幼虫適用    ※b カイガラムシ類適用    ※c キボシカミキリ適用

病害虫名	防除時期及び防除法	使用時期-本剤の使用回数	注意事項
縮葉細菌病	○春先、夏期発芽初期 1 被害地帯では、中間伐採をできるだけ浅くする。 2 薬剤散布 アグリマイシン-100 500倍 ヨネボン 500倍	-- 3 -- 5	1 梅雨期、風雨後は発病しやすいので注意する。 2 一ノ瀬は、リ病性品種であるので注意する。 3 アグリマイシン-100は蚕期中にも使用可能。
枝軟腐病	○収穫直後 ヨネボン 500倍 ○晩秋期 中間伐採は深切りを避け、緑葉を5枚以上残す。	収穫直後- 5	梅雨期、風雨後は発病しやすいので注意する。
芽枯病	○晩秋蚕終了直後 晩秋中間伐採後1か月ほどして、1~2芽切り直す。		
白紋羽病	○植付前 1 土壌消毒（土壌消毒の頁参照） 2 無病苗木を選び、根部を温湯消毒する。 ○全期間 1 粗大有機物の埋め込みを避け、よく腐熟した有機物を用いる。 2 被害根は堀取り、適切に処分する。		苗木の温湯消毒は、45℃の温湯に30~40分根部を浸漬する。
紫紋羽病	○植付前 1 土壌消毒（土壌消毒の頁参照） 2 無病苗木を選び、根部を温湯消毒する。 ○全期間 1 樹勢を強健に保つ。 2 被害株は堀取り、適切に処分する。		苗木の温湯消毒は、45℃の温湯に30~40分根部を浸漬する。
ヒシモン ヨコバイ	○5~9月 アプロード水和剤 1,000倍 ○夏切後、初秋蚕終了~晩秋蚕掃立前 エルサン乳剤 2,000倍	発生初期- 4 摘採15日前- 4	1 ヒシモンヨコバイは萎縮病の病原体となるファイトプラズマ様微生物を媒介する。 2 アプロード水和剤は幼虫適用。
クワシロ カイガラムシ	○夏切直後 石灰硫黄合剤 10倍 ○冬期(12月~3月) トモノールS 30倍 スプレーオイル 30倍	--- 12月~3月-- 12月~3月--	1 商品によって使用濃度が異なるので、ラベルを確認して使用する。 2 石灰硫黄合剤はカイガラムシ類適用。
クワキジラミ	1 ほ場内の通風をよくする。 2 枝を整理し、日照環境を改善する。		
カミキリムシ類	○6~8月 キボシカミキリムシの成虫捕殺は発生初期、中期、後期の3回は実施する。 ○6~7月(成虫発生期) バイオリサ・カミキリ 1本/樹 ○発芽前、夏切直後、晩秋期 トラサイドA乳剤 200倍 100倍	成虫発生初期-- 発芽前(3~4月)及び夏切直後 晩秋期 } - 6	1 回復の見込みのある被害株は株下げ樹勢更新を行う。 2 バイオリサ・カミキリはキボシカミキリ適用。地際に近い主幹の分枝部分等に架ける。
ハダニ類 クワノメイガ	○6~8月 モレスタン水和剤 2,000倍 ○8~9月 エルサン乳剤 1,500倍	発生初期-10 摘採15日前- 4	
アメリカ シロヒトリ	○6月、8~9月 分散する前に幼虫の巣網を取り除く。		

未成熟とうもろこし(スイートコーン)病害虫防除農薬一覧

農薬名	RACコード	有効成分名	本剤の使用回数	当該成分を含む農薬の総使用回数	適用病害虫名									
					すす紋病	紋枯病	アブラムシ類	ハダニ類	アワノメイガ	オオタバコガ	ツマジロクサヨトウ	カメムシ類	ネキリムシ類	
モンカットF40	7	フルトラニル	3	3		○								
シグナムWDG	7	ボスカリド	2	2	○									
	11	ピラクロストロビン		2										
リゾレックス水和剤	14	トルクロホスメチル	2	2		○								
トリフミン水和剤	3	トリフルミゾール	3	3	○									
テルト乳剤25	3	プロピコナゾール	2	2	○ ※a									
バリダシン液剤5	U18	バリダマイシン	3	3		○								
ダイアジノン粒剤5	1B	ダイアジノン	1(出芽時)	2										○
			2							○				
ガードベイトA	3A	ペルメトリン	4	4										○ ※a
アディオン乳剤	3A	ペルメトリン	4	4			○ ※a		○ ※a					
テルスターフロアブル	3A	ビフェントリン	2	2				○						
モスピラン顆粒水溶剤	4A	アセタミプリド	3	3				○						
スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	4A	ジノテフラン	3	3				○					○	
トランスフォームフロアブル	4C	スルホキサフロル	3	3				○						
アフーム乳剤	6	エマメクテン安息香酸塩	2	2						○	○			
アニキ乳剤	6	レピメクチン	3	3						○	○			
コルト顆粒水和剤	9B	ピリフルキナゾン	3	3				○						
デルフィン顆粒水和剤	11A	BT(生菌)	—	—						○ ※a	○ ※a			
エスマルクDF	11A	BT(生菌)	—	—						○ ※b				
コテツフロアブル	13	クロルフェナピル	2	2				○ ※a		○ ※a	○ ※a			
パダン粒剤4	14	カルタップ	2	2						○ ※a				
カスケード乳剤	15	フルフェノクスロン	2	2						○	○	○		
カネマイトフロアブル	20B	アセキノシル	1	1				○						
プレバソンフロアブル5	28	クロラントラニリプロール	3	4※1						○	○	○		
フェニックス顆粒水和剤	28	フルベンジアミド	2	2						○ ※a	○ ※a	○ ※a		
ベネビアOD	28	シアントラニリプロール	3	3				○		○	○	○		
ヨーバルフロアブル	28	テトラニリプロール	3	3						○	○	○		
ウララDF	29	フロニカミド	2	2				○						
プロフレアSC	30	プロフラニリド	3	3						○		○		
グレーシア乳剤	30	フルキサメタミド	2	2						○				
サフオイル乳剤	—	調合油	—	—						○ ※a				
フーモン	—	ポリグリセリン脂肪酸エステル	—	—						○ ※a				

※1 は種前の塗抹処理は1回以内、は種後は3回以内

※a とうもろこし登録 ※b 雑穀類登録

※未成熟とうもろこしは、大作物群=穀類(旧雑穀類)、中作物群=とうもろこし、作物名=未成熟とうもろこしの登録である。

ヤングコーンについてはp162に記載。

